

保育者養成における、ピアノ伴奏技能向上の試みⅡ

— 指導法変更に伴う効果についての量的分析 —

おく だ まさ よ
奥 田 昌 代

1. はじめに

教育・保育現場で必要とされる技能のうち、ピアノ演奏技能が上位を占めることについては過去の調査でも明らかであった¹⁾。平成20年度の本学学生の採用試験においても幼稚園で100%、保育所で95%の頻度でピアノに関する何らかの実演を求められている。また、学生が実習を通して感じる幼児教育・保育現場における音楽的能力についても平成18年度結果²⁾と同じく、平成19年度、20年度においてもピアノに関する記述が全体の半数を超えている。そして、総数の中でも一番多い意見は、「ピアノ伴奏を間違えても、とにかく止まらずに弾くこと」であり、「子どもの反応や表情を見ながら楽しくピアノを弾く技術」と続く。

しかし、入学してくる学生の約6割は全くの初心者かバイエル学習者である。そのようにピアノ演奏に慣れていない学生が短期大学2年間の学習で「子どもの反応や表情を見ながら楽しくピアノを弾く」までに向上することは非常に困難である。しかも、音楽専門学科ではないので、カリキュラム上もそのことに割ける時間はごく限られている。これまでも保育者養成校各校の器楽(ピアノ)授業の目的は、“保育現場に通用するピアノ技術”をできるだけ効率よく学生に身につけさせることとされてきた³⁾。

筆者は本学の初等教育学科において、2回

生の「幼児と音楽」という科目のうち45分30回のML授業を受け持っている。個々人の能力に応じたピアノ演奏技能を高める授業は個人レッスンでなされているので、ML授業では現場で必要とされる総合的な音楽技能を習得するための演習を行う。その中でもピアノ伴奏付けに割ける時間は20分×11回程度であるので、効率ということを強く意識して指導を行っている。本研究は、平成18年度から3年間、指導法を改善しつつ、同じ試験・意識調査を行うことによって、より高い教育効果を上げる指導法を探ったものである。

2. 研究方法

2.1 調査対象

平成18年度2回生	126名
平成19年度2回生	126名
平成20年度2回生	91名

2.2 調査方法

実技試験と意識調査の方法は、表1のとおりである。

2.3 評価方法

「実技試験」の採点に際しては、客観性を保つために下記の評価基準を用いた。しかし演奏には速度や躍動感など他の要素も大きく影響するので、その演奏が保育現場で使えるかどうか、「①できる」「②ある程度できる」

表 1 調査方法

「実技試験」	時期：通年第 27 回目の授業時 課題は当日指定(3 曲) 各自 30 分間練習後、フロッピーに録音して提出するという方法をとった。 歌旋律を右手で弾くことだけを指定し、伴奏における使用和音や形態については規定しない。 曲目は次の 3 曲 * 「ハッピー・バースデー・ツー・ユー」(ハ長調)『やさしいピアノ伴奏法』(音楽之友社) p. 18, 2. - 歌旋律のみの楽譜への伴奏付け課題 * 「とんでったバナナ」(ハ長調)『日本の童謡 200 選』(音楽之友社) p. 252 - 伴奏譜も付された楽譜使用。 - 伴奏にメロディがない曲の歌旋律への伴奏付け課題 * 「輪になってまわろう」(ニ長調)『続こどものうた 200』(チャイルド本社) p. 68 - コードネーム付き歌旋律への伴奏付け課題
「意識調査」	時期：「実技試験」の 1 週間後、通年第 28 回目の授業時 質問項目 1 伴奏付けに関する受講前の意識 2 伴奏付けに関する受講後の意識 3 伴奏付け時の意識 4 初見視奏に関する意識 5 伴奏付けの有用性についての認識度 6 連弾演習時の意識 7 本学入学時のピアノ進度 8 自由記述

は保育現場で使用可、「③あまりできない」「④全くできない」は使用不可であるという観点で採点した。

- ①できる：曲を通して違和感のない演奏ができています
- ②ある程度できる：違和感を覚える部分が 1 か所
- ③あまりできない：違和感を覚える部分が 2～3 か所
- ④全くできない：違和感を覚える部分が 4 か所以上

「意識調査」も、伴奏能力と意識度を比べやすくするために、質問 7 のピアノ進度調査以外は 4 分尺度で行った。

3. 結果と考察

データ分析に際しては、SPSS11.0 J for Windows を使用した。

3 か年の差異を考察する前に、その母集団にレベルの差がないかを調べなければ指導方法の変更のみによる変化とはいえないので、まずその点について表 2 に示す。試験結果との関係を明確化するために、「実技試験」出席者の前期試験曲名を基に比較を行った。

順位データの解析として Kruskal Wallis 検定を行った。それによると年度間に有意な差があるとはいえず、またレベルを⑤ハイレベル～①ソナチネ初歩の 5 段階評価として平均値を比べると平成 18 年度 2.22、平成 19 年度 2.12、平成 20 年度 2.29 となるので、ほぼ同レベルの集団であるといえる。本学では 2 回生時には全員ソナチネ以上の教則本でピアノ

表2 2回生時前期試験曲レベル

()は人数

教則本	平成 18 年度 レベル平均 2.22	平成 19 年度 レベル平均 2.12	平成 20 年度 レベル平均 2.29
⑤ ハイレベル	13.3% (15)	6.7% (8)	12.4% (11)
④ ソナタ程度	6.2% (7)	10.1% (12)	4.5% (4)
③ ソナチネ上級	18.6% (21)	8.4% (10)	22.5% (20)
② ソナチネ中級	23.9% (27)	37.0% (44)	23.6% (21)
① ソナチネ初歩	38.1% (43)	37.8% (45)	37.1% (33)
	欠損(13)	欠損(7)	欠損(2)

3か年間の Kruskal Wallis 検定による p 値 = 0.499

レッスンを受けることになるが、③ソナチネ上級、②ソナチネ中級、①ソナチネ初歩のソナチネレベルで比較すると、平成 18 年度 80.6%、平成 19 年度 83.2%、平成 20 年度 83.3%となり、ピアノが得意とはいえない群

が同程度の集団であるといえる。

3.1 実技試験結果

試験結果は表3のとおりである。平均値は「1 できる」～「4 全くできない」、までの

表3 「実技試験」結果

()は人数

	平成 18 年度 (126) 欠席(12)	平成 19 年度 (126) 欠席(4)	平成 20 年度 (91) 欠席(2)
* 「ハッピー・バースデー・ツー・ユー」 (ハ長調)			
	Mann-Whitney 検定による p 値 = 0.013 < 有意水準 0.05		p 値 = 0.031 < 有意水準 0.05
1 できる	平均値 1.95 欠損(13) 42.5% (48)	平均値 1.62 欠損(7) 55.5% (66)	平均値 1.40 欠損(2) 70.8% (63)
2 ある程度できる	30.1% (34)	28.6% (34)	18.0% (16)
3 あまりできない	17.7% (20)	15.1% (18)	11.2% (10)
4 全くできない	9.7% (11)	0.8% (1)	0.0% (0)
* 「とんでったバナナ」 (ハ長調)			
	Mann-Whitney 検定による p 値 = 0.001 < 有意水準 0.05		p 値 = 0.052
1 できる	平均値 2.02 欠損(12) 34.2% (39)	平均値 1.63 欠損(7) 54.6% (65)	平均値 1.43 欠損(16) 69.3% (52)
2 ある程度できる	39.5% (45)	30.3% (36)	20.0% (15)
3 あまりできない	16.7% (19)	13.4% (16)	9.3% (7)
4 全くできない	9.6% (11)	1.7% (2)	1.3% (1)
* 「輪になってまわろう」 コードネーム付(ニ長調)			
	Mann-Whitney 検定による p 値 = 0.971		p 値 = 0.305
1 できる	平均値 1.40 欠損(20) 75.5% (80)	平均値 1.40 欠損(15) 75.7% (84)	平均値 1.27 欠損(24) 82.1% (55)
2 ある程度できる	14.2% (15)	13.5% (15)	10.4% (7)
3 あまりできない	5.7% (6)	7.2% (8)	6.0% (4)
4 全くできない	4.6% (5)	3.6% (4)	1.5% (1)

欠損値は欠席者とその曲を録音しなかった者の値

4段階評価としてその平均を出したもので、値が少ないほど成績が良い。

前年度の調査結果を基に指導法の変更を試みたので、平成18年度-平成19年度間、平成19年度-平成20年度間においての変化をみるために、それぞれに Mann-Whitney 検定を行った。

3.2 意識調査結果

意識調査の結果は表4のとおりである。指導法変更に伴う各項目の年度間の変化をみるために Mann-Whitney 検定を行った。

3.3 考察

平成18年度の調査結果から、「伴奏付けの指導手順はコードによる伴奏付けから導入する方が効果的である」との仮説を得ていた⁴⁾。それまでは、各調の音階における I、IV、V の和音の重要性を学ぶことから始め、左手でカデンツを練習した後に伴奏付けを行う方法をとってきたが、研究結果を受けて平成19年度はまずコードネームの付されている歌旋律楽譜を使用し、左手はベース音1音のみで伴奏することから始めた。そして次にコードを基本形で弾くことに慣れた後、和音の連結に適した転回形も練習する手順で伴奏付け指導を行った。

その結果、表3に示したとおり、平成18年度と平成19年度の試験結果には明らかに有意な水準で改善がみられた。「輪になってまわろう」の課題はコードネームの付された楽譜への伴奏付けであるので、書かれたコードに従って伴奏付けできるため、試験結果には差異は見られなかった。

このことから、仮説が正しかったことが証明でき、平成20年度も同じ方法で指導を行った。指導手順に変更は加えなかったため、平成20年度調査は前年度の結論を補完する目的で行ったものであったが、より一層進歩がみられたことは驚きであった。「ハッ

ピー・パースデー・ツー・ユー」においては有意な変化がみられ、「とんでったバナナ」においても有意水準をわずかに越えてはいるが平均値が良くなり、明らかに改善されている。筆者がその指導手順に慣れてポイントを的確に学生に示せるようになった等、表には現れない要因もあろうが、平成19年度と平成20年度の授業計画における明確な差異は、e-learning の課題に3曲の伴奏付け演習を加えたことである。

e-learning は平成19年度から授業に取り入れたのであるが、初年度は1回生時に学習した音楽理論の復習として音名、音符、調号と調との関係、音程、和音の理解までを課題とした。しかし、本学習の目的である歌旋律へのコード付けまでを自己学習させたいとの考えから、平成20年度は、「きよしこのよる」(ハ長調)、「チューリップ」(ヘ長調)、「うみ」(ト長調)の3曲の旋律に適切なコードを選択する課題を出した。その学習の完了期限が実技試験の直前であったので、これが思いのほか効果を上げたのではないかと考える。アンケート調査の自由記述に「伴奏付けの授業の進むスピードが早かった」という意見がみられたように、授業では各人の理解を待っている進めない面がある。その点、それぞれのペースで取り組める e-learning による学習法が効果を奏したのではないかと考える。

一方、問題点も明らかになった。実技試験結果は良くなっているが、表4の意識調査結果の質問項目2「現在の状態」の平均値が良くなっていない。実技試験結果は平成18年度より平成19年度、平成19年度より平成20年度と格段に良くなっているのに、「伴奏付けできているか」どうかの意識はむしろ悪くなっている。これは大きな問題である。弾けるようになっている事実が学生自身の自信にはつながっていないのである。

また、質問項目3「伴奏付け時の意識」は

表4 ML授業(伴奏付け等)に関するアンケート調査結果 平成18, 19, 20年度

()内は人数

 p 値は平成18年度-平成19年度間、平成19年度-平成20年度間の Mann-Whitney 検定による

	回集数	(115) 平成18年度	(122) 平成19年度	(88) 平成20年度
1. この授業で学ぶ前の状態をお尋ねします。				
①知っているメロディへの簡単な伴奏付けはできていましたか？				
		p 値=0.418	p 値=0.672	
		平均値：2.696	平均値：2.582	平均値：2.534
1 できていた	13.0% (15)	16.4% (20)	12.5% (11)	
2 ある程度できていた	33.0% (38)	29.5% (36)	37.5% (33)	
3 あまりできなかった	25.2% (29)	33.6% (41)	34.1% (30)	
4 全くできなかった	28.7% (33)	20.5% (25)	15.9% (14)	
②コードネームの書き込まれている、知っているメロディへの伴奏付けはできていましたか？				
		p 値=0.848	p 値=0.948	
		平均値：2.722	平均値：2.694 欠損(1)	平均値：2.716
1 できていた	12.2% (14)	14.0% (17)	8.0% (7)	
2 ある程度できていた	28.7% (33)	29.8% (36)	34.1% (30)	
3 あまりできなかった	33.9% (39)	28.9% (35)	36.4% (32)	
4 全くできなかった	25.2% (29)	27.3% (33)	21.6% (19)	
2. 現在の状態をお尋ねします。最も近いものに○をつけてください。				
①知っているメロディへの簡単な伴奏付けはできますか？				
		p 値=0.404	p 値=0.459	
		平均値：1.991	平均値：1.926	平均値：2.000
1 できる	25.2% (29)	27.0% (33)	22.7% (20)	
2 ある程度できる	50.4% (58)	54.9% (67)	56.8% (50)	
3 あまりできない	24.3% (28)	16.4% (20)	18.2% (16)	
4 全くできない	0.0% (0)	1.6% (2)	2.3% (2)	
②コードネームの書き込まれている、知っているメロディへの伴奏付けはできますか？				
		p 値=0.966	p 値=0.135	
		平均値：1.983	平均値：1.984	平均値：2.136
1 できる	26.1% (30)	23.8% (29)	14.8% (12)	
2 ある程度できる	49.6% (57)	54.9% (67)	61.4% (54)	
3 あまりできない	24.3% (28)	20.5% (25)	19.3% (17)	
4 全くできない	0.0% (0)	0.9% (1)	4.5% (4)	
3. 伴奏付けをする時の、あなたの意識をお尋ねします。最も近いものに○をつけてください。				
①メロディへの簡単な伴奏付けをする時はどうですか？				
		p 値=0.939	p 値=0.286	
		平均値：2.600	平均値：2.600 欠損(2)	平均値：2.747 欠損(1)
1 何調であるかを判断して、それに合った伴奏をつけている。	13.9% (16)	17.5% (21)	14.9% (13)	
2 一応何調であるかを判断して弾いているが、わからない部分は勘で伴奏をつけている。	33.0% (38)	26.7% (32)	20.7% (18)	
3 何調であるかを判断したいが、わからないので適当に伴奏付けしている。	32.2% (37)	34.2% (41)	39.1% (34)	
4 何調であるかは気にせず、耳で判断して勘で伴奏付けしている。	20.9% (24)	21.7% (26)	25.3% (22)	

	平成 18 年度	平成 19 年度	平成 20 年度
②コードネームの書き込まれているメロディへの伴奏付けをする時はどうですか？	p 値=0.640	p 値=0.035 < 0.05	
	平均値：1.948	平均値：1.916 欠損(3)	平均値：2.148
1 書き込まれているコードネームに従って伴奏付けしている。	31.3% (36)	32.8% (39)	21.6% (19)
2 知っているコードネームには従うがわからないところは勘で伴奏付けしている。	47.8% (55)	50.4% (60)	51.1% (45)
3 コードネームに従って弾きたいが、わからないので適当に伴奏付けしている。	15.7% (18)	9.2% (11)	18.2% (16)
4 コードネームは気にせず、耳で判断して勘で伴奏付けしている。	5.2% (6)	7.6% (9)	9.1% (8)
4. 全く知らない曲のメロディを見た時、ピアノですぐに弾けますか？ 最もちかいもの一つに○をつけてください。	p 値=0.352	p 値=0.205	
	平均値：2.313	平均値：2.410	平均値：2.568
1 弾ける	14.8% (17)	11.5% (14)	3.4% (3)
2 ある程度は弾ける	47.0% (54)	45.1% (55)	48.9% (43)
3 リズムがわからない	30.4% (35)	34.4% (42)	35.2% (31)
4 全くできない	7.8% (9)	9.0% (11)	12.5% (11)
5. 簡単な伴奏付けの技能は、幼稚園や保育園の現場において役立つと思いますか？	p 値=0.619	p 値=0.739	
	平均値：1.348	平均値：1.312	平均値：1.333 欠損(1)
1 大変、役立つと思う	66.1% (76)	68.9% (84)	66.7% (58)
2 役立つと思う	33.0% (38)	31.1% (38)	33.3% (29)
3 あまり役立たないと思う	0.9% (1)	0.0% (0)	0.0% (0)
4 全く役立たないと思う	0.0% (0)	0.0% (0)	0.0% (0)
6. 初見視奏や伴奏付けの練習のために、隣同士での連弾演習を取り入れましたが、その時の気持ちはどうでしたか？ 最も近いもの一つに○をつけてください。	p 値=0.188	p 値=0.748	
	平均値：2.089 欠損(3)	平均値：1.915 欠損(4)	平均値：1.931 欠損(1)
1 大変、楽しかった	20.5% (23)	22.9% (27)	20.7% (18)
2 楽しかった	60.7% (68)	66.1% (78)	67.8% (59)
3 楽しくなかった	8.0% (9)	7.6% (9)	9.2% (8)
4 苦痛だった	10.7% (12)	3.4% (4)	2.3% (2)
7. あなたの、本学への入学時のピアノの進度についてお尋ねします。	p 値=0.202	p 値=0.866	
	平均値：3.261	平均値：3.057	平均値：3.034
1 全くの初心者	13.0% (15)	13.9% (17)	17.0% (15)
2 高校の頃から習いはじめて、バイエルの途中	15.7% (18)	22.1% (27)	15.9% (14)
3 子どもの頃習っていたが、バイエルから始めた	20.0% (23)	18.9% (23)	27.3% (24)
4 ブルグミュラー、ソナチネ程度	34.8% (40)	34.4% (42)	26.1% (23)
5 ソナタ以上	16.5% (19)	10.7% (13)	13.6% (12)

平成 19 年度-平成 20 年度間で目に見えて悪化しており、②「コード付け時の意識」に至っては p 値=0.035<0.05 となっており、有意な値で理論ではなく勘に頼って伴奏付けする傾向に陥っていることが分かる。

これは明らかに理論に割く時間を最小限にし、実演重視で耳を磨くことを優先する授業を行った結果であろう。エレクトーン系のレッスンを受けてきた者が感覚で見事に伴奏付けをする様をイメージし、指導手順を変更

したのであるが、それがはっきりとデータに出る結果となった。指導が功を奏したといえるのかもしれないが、問題は学生たちがその伴奏法に自信を持っていないことである。

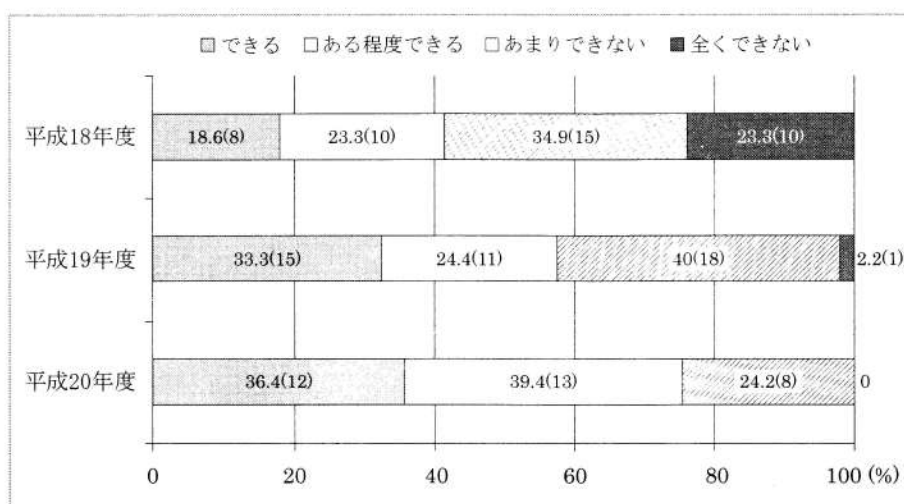
しかし、最もピアノを苦手としている群である「ソナチネ初歩レベル」のみを抽出して年度間の変化を表5に示したが、有意な水準

で伴奏付けできる学生が増加していることが分かる。ピアノ学習歴の長い学生は楽譜どおりにすぐに弾けるので、簡単な伴奏付け能力は特にピアノ進度の遅い者に有効であることを考えると、この結果は評価できる。

表6は意識調査の質問項目7「ピアノ学習歴」と他の質問項目との相関性を示したもの

表5 ソナチネ初歩レベルの試験結果 年度間比較 [値は% ()は人数]

「ハッピー・バースデー・ツー・ユー」 Kruskal Wallis 検定による p 値 = 0.004 < 有意水準 0.05



「とんでったバナナ」 Kruskal Wallis 検定による p 値 = 0.011 < 有意水準 0.05

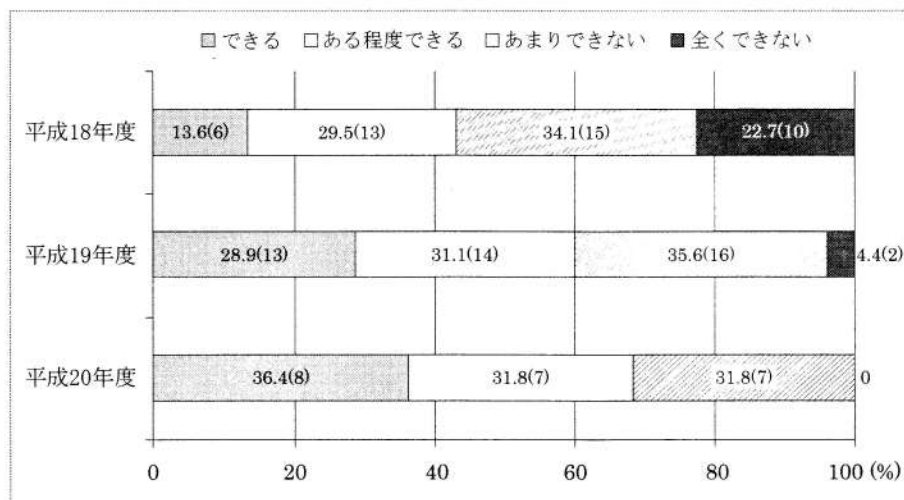


表6 ピアノ学習歴と各項目の Pearson の相関係数(平成 20 年度調査)

質問項目	1-①	1-②	2-①	2-②	3-①	3-②	4	5	6
Pearson の相関係数	-.594**	-.558**	-.463**	-.529**	-.306**	-.252*	-.586**	.006	-.214*

である。当然のことながらほとんどの項目で強い相関性が出ているが、項目5「伴奏付け学習は役に立つと思うか」の質問にはアスタリスク*が付いておらず、ピアノの苦手な学生も「教育・保育現場で役立つ」と強く感じていることが分かる。その気持ちを汲み上げる指導をしなければならない。その他、ピアノ学習歴との相関性の低い項目である、3-②「コード付け」と6「連弾演習」に着目し、レベルの底上げを図っていく必要がある。平成19年度調査でもコード伴奏付けのみ、ピアノ初歩の学生たちにも苦手意識がないという結果が出ていた。ここに着目して、今後もコード学習から導入する指導法を推し進めていかなければならないことが分かった。

4. おわりに

アンケートの自由記述に「ピアノができる人にとっては調についての説明はわかりやすかったかもしれないけれど、ピアノが苦手な者にとっては全くわからなかった」との意見があった。ほとんど理論に触れなかったはずの平成20年度のことである。ハ、二、ヘ、ト長調のⅠ、Ⅳ、Ⅴしか取り上げていないので、ピアノの得手不得手に関わらず理解できるはず、と考えるのは指導者側の論理であるのかも知れない。

教育・保育現場では幼児に音楽の楽しさや、音楽を楽しむ心を教えていかなければならない⁵⁾。楽譜に不慣れな学生が多い保育者養成校では、心理的に音楽を拒否することのない指導法を模索していかなければならない。

一方、今回の調査研究で明らかになったように、理論的裏付けが無ければ自信につながらない。教育・保育者として園児や保護者の前に立つには、レベルに応じた基礎基本を理解しているという自信が必要である。

上記2つを限られた授業時間の中で両立していくことは大変困難であるが、今回有効であることが分かったe-learningの課題設定等も改善しつつ、今後もピアノ伴奏技能向上を図っていかなければならない。

引用・参考文献

- 1) 奥田昌代：保育者養成における、ピアノ伴奏技能向上の試み——ML（ミュージックラボラトリー）システムを活用して——、大阪信愛女学院短期大学紀要、第41集、p.41（2007）
- 2) 奥田昌代：保育者養成における、ピアノ伴奏技能向上の試み——ML（ミュージックラボラトリー）システムを活用して——、大阪信愛女学院短期大学紀要、第41集、p.42（2007）
- 3) 嶋田由美：保育者養成におけるピアノ教育——表現力の育成を目指した教材編成——、大阪女子短期大学紀要、第20号、pp.117-118, 120-121（1995）
- 4) 奥田昌代：保育者養成における、ピアノ伴奏技能向上の試み——ML（ミュージックラボラトリー）システムを活用して——、大阪信愛女学院短期大学紀要、第41集、p.48（2007）
- 5) 五十嵐忠編著：『幼児保育のための器楽遊び』、圭文社（2005）

（受理 平成21年4月6日）